

渋谷を災害に強く安全な街へ

地震や集中豪雨への備えとして、インフラの脆弱性を克服

1964年の東京五輪前後に開業した施設は築50年を超え、老朽化による脆弱性が懸念されています。さらにスリパチ状の地形の中心にある渋谷駅はとりわけ浸水や冠水被害を受けやすく、集中豪雨などへの対策も重点課題でした。

また災害以外にも、複雑な駅周辺の構造に起因する自動車交通の混雑や、道幅が狭いにもかかわらず人通りが多い路地での配送業者の荷捌きなどによって、歩行者の安全に支障をきたす場面がこれまではありました。

今回の渋谷駅周辺の開発では、官民が連携してインフラの脆弱性を克服するとともに、歩行者デッキや荷捌き施設の設置を通じて、街を訪れる人たちの安全性を高めていきます。



渋谷地下街の浸水(1999年8月)

1- 渋谷駅東口雨水貯留施設を設置

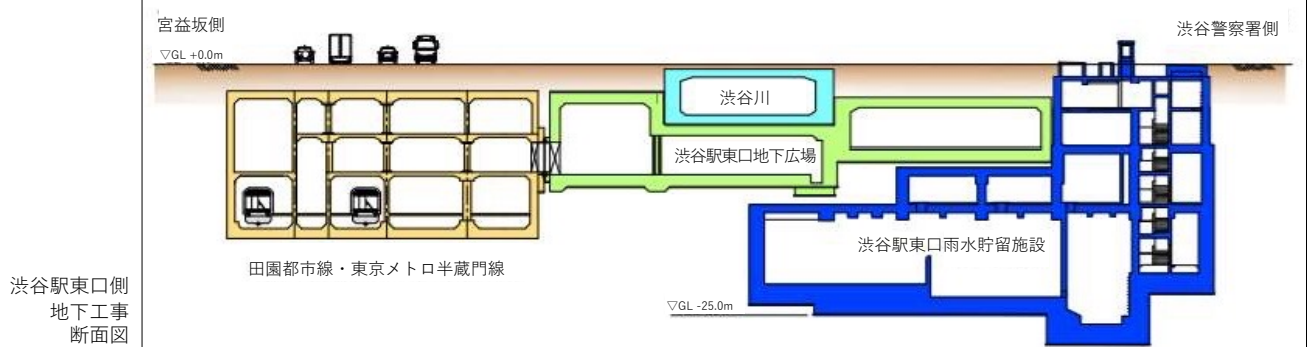
近年集中豪雨が増加しており、浸水対策として渋谷駅東口広場の地下約25メートルの深さに、約4,000トンの雨水を一時的に貯水できる渋谷駅東口雨水貯留施設が2020年8月に完成しました。

1時間あたり50mm～75mmの強さの雨が降った際、雨水貯留施設に雨水を溜め、天候の回復後に古川幹線下水へポンプアップにより排水。スリパチ状の最も低い位置に駅があるため、この雨水貯留施設の整備により安全・安心なまちづくりが実現します。



渋谷駅東口雨水貯留施設の概要

供用開始：2020年8月31日 深さ：地下25m
最大貯留量：約4,000トン（25m×6コースプール13個分相当）



2 渋谷駅周辺の帰宅困難者対策

多くの企業・学校・商業施設・エンタテインメント施設などが集中し、通勤・通学・買い物・観光などで多くの方々が来訪する渋谷駅周辺において、大規模地震をはじめとする災害が発生し、交通機能などが停止してしまった場合、速やかに自宅に帰ることができない人が多数発生して、大きな混乱が生じることが予想されます。職場や学校などに留まる約3万6,000人に加え、屋外で約3万人が行き場なく滞留することが推定されています。

◆「渋谷駅周辺帰宅困難者対策協議会」を結成

2009年5月、渋谷駅周辺にある約100カ所の事業所・学校・行政が一体となり、「渋谷駅周辺帰宅困難者対策協議会」を結成。東急株式会社は事務局として同協議会の中心的役割を担い、渋谷区との連携体制のもと、渋谷の街を訪れている人が大規模災害時に混乱しないよう、帰宅困難者対策の実効性を高めるための検討や、訓練の計画・実施による検証などの活動を推進しています。

訓練の継続などによって、今後も開発により変化していく渋谷駅周辺の災害対策を充実させ、渋谷駅周辺地域都市再生安全確保計画への協力を継続しながら、さらに多くの方に安心して来訪いただけるまちづくりに取り組みます。

2018年度の活動

- 200名規模の総合訓練を渋谷区と共催
- スクランブル交差点の大型ビジョンを利用した情報発信、「渋谷区防災ポータルサイト」の活用、避難誘導経路の確認、受け入れ施設におけるオペレーション確認など、渋谷駅周辺地域都市再生安全確保計画の実証検証を実施



大型ビジョンでの情報発信



受け入れ施設への入所風景

◆ 東急グループ施設の受け入れ体制を強化

帰宅困難者への対策として、東急グループは各施設合計で2万㎡を超える受け入れ面積を確保するとともに、防災備蓄倉庫の整備など進めています。

各施設の受け入れ面積

渋谷ヒカリエ	約5,500㎡	渋谷スクランブルスクエア (東棟・中央棟・西棟合計)	最大約4,700㎡
渋谷キャスト	約295㎡	渋谷駅桜丘口地区	最大約3,200㎡
渋谷ストリーム	約3,157㎡	渋谷二丁目17地区	最大約450㎡
渋谷ソラスト	約772㎡	渋谷エクセルホテル東急	約467㎡
渋谷フクラス	約1,000㎡	セルリアンタワー東急ホテル	約1,089㎡

3 歩行者に配慮した荷捌き場を整備

2020年1月、渋谷マークシティの南側に位置する渋谷中央街では、歩きやすい街の実現を目指して、新しい荷捌きルールが策定されました。もともとこのエリアは人通りの多さと道幅の狭さから、配送車両の駐車による混雑が課題でした。

そこで、プラザ通りに設置した貨物用パーキングメーターに加えて、渋谷フクラスの地下2階に地域荷捌き場「ESSA（エッサ）」を設置。路上荷捌きを減らすことで、歩行者の安全を守ります。



1 プラザ通り 貨物用パーキングメーター
(20分100円、現在は40分200円)



2 渋谷フクラス地下2階
地域荷捌き駐車場「ESSA」
7台分 (20分まで無料、以降20分300円)



地域荷捌き場利用対象エリア